
ひと夏の経験 初めての告白

りこりす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひと夏の経験 初めての告白

【NZコード】

N7811C

【作者名】

りこりす

【あらすじ】

大学の夏休み。海の家でバイトをしていた2人の大学生が主人公。叶わないと思つたら絶対に告白などしない私が、一目ぼれをしてしまつた彼に思い切つて告白する。私の初の告白はどつなることじょう・・・

この夏の 海の家でのバイト先で
偶然知り合い、初めてしてしまったひとめぼれ。
きっと、叶わないと思ったら、絶対告白などしない、
ひねくれ者の私。

でも、そんな私を変えさせるほど、
あなたは、キラキラして 眩しくて・・・
思い切って告白しよう。

そう決めてしまった、その日の夜

私の頭の中は、断られた時の態度ばかり考えた。
結局、一睡もできないまま、翌日バイトの仕事が終わつた後
思い切つて告白した。

なぜか、言葉が出る前から涙が流れだし
震える声でこう言つた。

「あなたが好きです。大好きです・・・」

それだけ言うのが精一杯。

彼の顔などもう見られなかつた。

暫くの…沈黙。

ああ、断られる。そう思った瞬間だつた。

私の左手をグイと引つ張り、思い切り抱きしめてくれた彼。
「バカだなあお前、それならそつともつと早く言えよ。」

私は彼の胸にしがみつき、声を殺してなきまくつた。
たくましい彼の胸はいい香り。

早く、早く止まつて下さい、私の涙。

うつむいていた私の頬を暖かい手で包み込み

彼は、指で私の、涙をぬぐつてくれた。

「そんなに泣くな」囁くよつこいつと同時に優しく重ねてくれた柔らかな声。

もう、私の鼓動が聞こえてしまつ。

恥ずかしいよ、でも最高に幸せよ。

もう私は言葉が出なくつて

まるで子供のよになきじやぐるばかり。

もう一度抱きよせて

「気持ちが静まるまでなればいいし、俺の胸を貸してやるよ」今まで20年間生きてきて、こんな幸せ味わつたことあつたかな。もしかして、これは夢なのでは？

いや、違う、現実だ。

「あ・り・が・と」

やつと言えた短い言葉

彼は、私の髪を撫で、真白な歯をいぼしていつ言った。

「それは、じつちのセリフだよ」

少し落ち着きよつやく笑顔になれた私。気がついたら夕暮れ時。

人もまばらになつた海辺を手をつないで歩いて行つた。

大好きな彼と手をつないで、

潮の香りを満喫しながら歩いて行つた。彼がポツンと言つた。

「俺は今、世界一、幸せ者だぜ」

ふいにしゃがんだ彼、

何かを拾つて私の手に握らせた。

見ると、うすいピンク色の貝殻が、夕日に反射してキラキラ光つてそこにあつた。

「8月7日、今日は、俺たちの記念日だ」

そう言って彼はぶっきらぼうに小石を拾つて海に向かって力一杯投げた。

そんな彼の仕草のひとつひとつが愛しくて
私は、思いつきり、後ろから、彼に抱きついた。 。 。 。

そして始まつた、私と彼の遠距離恋愛。 。 。

続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7811c/>

ひと夏の経験 初めての告白

2010年11月11日07時26分発行